



気兼ねなく国内外を歩き来でなくなつてから、既に1年経つ。新型コロナウイルス感染症の感染拡大はとどまることなく、筆者が住む愛知県も3度目の緊急事態宣言が発令中だ。前回このオープンカレッジに、オンラインの需要拡大によつて、世界との距離が近づいたと寄稿した。でもやはり、リアルに行きたい、世界が見たいと私たちは思っている。しかし今は難しい。そんな今だからこそ、身近な異文化に触れてみてはいかがだろうか。

「食」から始める多文化共生

取材している方で、今回は愛知県や岐阜県を巡りに来たという。ちょうど西アフリカ・ガンビア出身の知人が名古屋市内でレストランを始めたので、筆者はそこを紹介した。ちなみに、日本で唯一ガンビア料理を提供する店である。取材の様子を伺うと、知る人ぞ知る多国籍レストランを多数回られたようだ。ブラジル、パキスタン、トルコ、ペルシア、エジプト、フィリピン……と多岐にわたり、どれも名古屋周辺部の工業化されたエリアに店舗を構える。取材写真を拝見すると、まるでその国にあるレストランのような雰囲気だ。

愛知県は在留外国人が多く、その数は東京都に次ぎである。働くところの近くに人びとは住む。仕事があるところに人は集まる。同胞が多く同じエリアに住むようになる。そこに彼らを支える食の場、つまりレストランが出来るとは必然だろう。異国の地にながら母語で会話し、母国の料理を食べることで得られる安心感。長期間、日本を離れた経験のある方なら、その感覚が分かるのではないだろうか。慣れない土地で同胞と会い、母国の料理を食べられる場所があるということが、彼らにとってどれほどの救いになることか。

外国人が集い、異国のご飯を食べるレストラン。リアルに海外に出られない今だからこそ、身近にある異文化にアクセスする機会なのかもしれない。匂いや味、言葉、雰囲気、全てでプチ海外旅行気分を味わうことができるだろう。もちろん感染対策は万全にお願いしたい。

今こそ身近な

「海外」へ

少し前になるが、あるシヤーナリストとお話する機会があった。国内のマニアックなエスニック料理屋を



愛知淑徳大学 助教授 野 淑
淑徳大学 経営学 野 淑

全国2番目であり、実に県内人口の4%弱を占める。加えて外国人労働者数も第2位、総数のうち約10%に当たる人びとが、ここ愛知県に在住していることなる。外国人労働者の多くは、製造業に従事している。ご存知の通り、愛知県は輸送機器工業を中心とした産業が集積する「日本一のものづくり県」だ。その産業を支える労働力の一部を、外国人労働者が担っているのと筆者は思う。

多文化共生の推進が叫ばれて久しい。自治体ごとに施策が展開されてはいるが、共に生活する私たち住民それぞれの意識が何よりも大切だ。外国人の労働力は今後ますます必要とされ、在留する外国人の数も増えていくことは間違いない。まずは相手を知ること。そのきっかけとして、食から入ってみるのも悪くないと筆者は思う。

かんの・しゅく 文化人類学、アフリカ地域研究、名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1988年生まれ。